

複数の自宅療養者の状態 一目で

新型コロナ

一度に管理する患者数は、感染「第七波」の最も多い時期で数十人いたが、「全員分の健康

スマホなど患者から毎朝送つてもうこうした情報が、リアルタイムでパソコン画面に反映される。「体温が三八度以上」「胸が痛い」など、注意が必要な場合は赤色で表示され、必要に応じて電話で病状を確認する。「二、三日食事がとれない」「緊急を要するケースは自身や看護師らが自宅を訪れる。

松戸市常盤平の「どうだれ内科診療所」。診察の合間に堂垂医師がパソコンで、自宅療養者十人分の体温や酸素飽和度、主な症状といった健康状態をチェックしていく。

新型コロナの発熱外来がある松戸市常盤平の「どうだれ内科診療所」。診察の合間に堂垂医師がパソコンで、自宅療養者十人分の体温や酸素飽和度、主な症状といった健康状態をチェックしていく。

健康観察 松戸の医師 効率化システム開発

新型コロナウイルス感染症の「自宅死」が増加傾向にある

中、松戸市で診療所を営む千葉大学部臨床教授の堂垂伸治医師(七四)が、自宅療養者の健康観察を効率化するシステムを開発した。複数の患者の状態を一覧できる使いやすさから、近隣医療機関でも活用されている。発生届の提出を高齢者に限定する「全数把握簡略化」の全国導入を前に「自宅療養者へのケア充実が今後いつそう求められる」とシステム普及を目指す。

新型コロナの発熱外来がある松戸市常盤平の「どうだれ内科診療所」。診察の合間に堂垂医師がパソコンで、自宅療養者十人分の体温や酸素飽和度、主な症状といった健康状態をチェックしていく。

スマホなど患者から毎朝送つてもうこうした情報が、リアルタイムでパソコン画面に反映される。「体温が三八度以上」「胸が痛い」など、注意が必要な場合は赤色で表示され、必要に応じて電話で病状を確認する。「二、三日食事がとれない」「緊急を要するケースは自身や看護師らが自宅を訪れる。

全数把握簡略化 ケア充実へ普及目指す

近隣の四医院でもこのシステムを導入している。システムは、第六波のただ中であつた今年一月、仲間の技術者三人と共に開発した。開発者の名前の中文字と、厚生労働省が開発した同様の感染者管理システム「HER-SYS(ハーネス)」を掛け、「DODU-SYS(デューシス)」と名付けた。

ハーシスにも、自宅療養者に日々の体温や症状の有無を入力してもらう健康管理機能はある。ただ「医療機関に囲っては使い勝手が悪かった」(堂垂医師)。アクセスするにはパスワードで確認作業に長い時間はかかる「ない」と説明する。患者には毎回、体調を確認したことを告げるメールも送信しており、自宅療養の不安を和らげる効果もあるという。

現在、同診療所では、スマホを持っていない高齢者らを除き、陽性と診断した患者の約八割にあたる延べ五百人が登録。

各感染者の情報が一覧表示されるデューシスの画面(堂垂医師提供)

近隣の四医院でもこのシステムを導入している。システムは、第六波のただ中であつた今年一月、仲間の技術者三人と共に開発した。開発者の名前の中文字と、厚生労働省が開発した同様の感染者管理システム「HER-SYS(ハーネス)」を掛け、「DODU-SYS(デューシス)」と名付けた。システムは、第六波のただ中であつた今年一月、仲間の技術者三人と共に開発した。開発者の名前の中文字と、厚生労働省が開発した同様の感染者管理システム「HER-SYS(ハーネス)」を掛け、「DODU-SYS(デューシス)」と名付けた。

厚労省によると、自宅死は第

七波の感染拡大に合わせて増加。ハーシスの記録では、八月には過去最多の百二十四人を数えた。昨年十月~今年九月の一

年間では三百三十一人に上る。その多くは高齢者だが、二十代と三十代はそれぞれ十五人と、若者も一定数いた。

今月二十六日から、感染症の全数把握の簡略化が全国一律で導入される。これまで行政は、医療機関が保健所に提出する「発生届」を元に感染者を把握し、健康観察を続けてきたが、外は提出されなくなる。そのため、自宅療養者の症状が悪化した場合にどう対応するのかが、課題の一つに目されている。

「最悪の場合、死に至る危険な感染症だと忘れてはいけない」。こう強調する堂垂医師は、これからも自分が受け持つ全陽性者の健康観察を続けるつもりだ。

デューシスは、パソコンさえあれば簡単に導入できるとい

う。提供は無償。問い合わせは堂垂医師=スールアドレスdou-tare@apricot.ocn.ne.jp=